

明治天皇御製（明治三十七年）

世とともに語りつたよ國のため命をすてし人のいさをを

この年二月、日露開戦。皇軍將兵は陸に海に死をも恐れず勇敢に戦ひ、十二月に入り、屍しかばねの山を築き、夥おびただしい血を流す攻防戦を制し二〇三高地を占領。旅順のロシア艦隊をほぼ壊滅させたのですが、これは、そんな年に詠み給ひました御製であります。

國の爲に勇戦奮闘、二つ無き尊い命を國に捧げた將兵の勲功いささは、世の変遷が如何にあらうとも、未来永劫、子々孫々に語り伝えていかなければならない、との大御心と拜されるのであります。

大正天皇御製詩（大正四年）

臨靖國神社大祭有作

靖國神社大祭二臨のぞミテ作有リ

武夫重義不辭老

武夫義ヲ重ものふンジテ危あやふキヲ辞じセズ

想汝從戎殞命時

想おもフ汝なんぢノ戎ぶんがニ從まヒテ命いのちヲ殞おとスノ時

靖國祠中嚴祭祀

靖國祠中祭祀しちゆうヲ嚴げんニス

忠魂萬古護皇基

忠魂ちゆうこん萬古まんこ皇基かうきヲ護まもル

この年四月二十九日、靖國神社に於いては國事殉難者を合祀して、臨時大祭が挙行された。天皇は靖國神社に行幸、御親拜。この御製詩はその御砌詠ませ給ひしものである。

《意訳》軍人達は「義」を重んじて、一旦緩急に當つては命の危険をも顧みることには無く、その軍人達が従軍し、命を落とした時の事が種々に想はれるのである。靖國神社にあつては嚴かに祭祀が執り行はれ、忠義のみたま達は、とこしなへに皇基を護つてゐるのである。

昭和天皇御製（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

大東亜戦争終戦の頃、昭和天皇が國民の身の上を甚く軫念しんねん（天皇が御心配遊ばすこと）し給ひ、四首の御製を詠んで作られた事が明らかになつたのは昭和四十三年に元侍従次長木下道雄氏の著書『宮中見聞録』が世に出てからであります。それ等の御製は『宮中見聞録』中に「猛鳥の襲撃に対し雖まもる親鳥の決死の姿を、涙して想ふだけである。」との著書の言葉と共に記録されてゐる。御製としては異例とも申し上げべき破調はてつう（三十一音に合つてゐない）に、殊に有難き大御心を拜するのみであります。

今上天皇御製（平成七年）

國がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

これは平成七年、「戦後五十年遺族の上を思ひて」の詞書にて詠み給ひ、日本遺族会に御下賜遊ばされた御製であります。この時、皇后陛下も「いかばかり難かたかりにけむたづさへて君ら歩みし五十年いそとせの道」の御歌を下されました。

平成六年、終戦五十周年の年を翌年に控へ、両陛下は硫黄島に、そして五十周年の年七年には長崎、広島、沖縄、東京と戦災激甚の地を巡拜の爲に行幸啓あらせられたのであります。

此の「聖帝四代の御製碑」を通じて、國民・県民齊しく「雖まもる親鳥」の如き尊き御姿を拜し奉りませう。